

特集
里地
～原風景を守り育てる～

Special Features
Rural land
Protecting and Nurturing Natural Scenery

里地と人・都市をつなぐ 里地モデル
Rural land model linking rural land
with people and cities

鳥海山にブナの森の復元を！

人と自然の共生をめざして

須田和夫

SUDA Kazuo

鳥海山にブナを植える会/会長



1—なぜ今、ブナなのか

「鳥海山にブナを植える会」は、発起人でもある佐藤文夫副会長が発案し、1994年の発足以来、鳥海山のブナの森の再生をめざして活動してきました。この間、様々な試行錯誤を重ねながらも地元にとどまらず広い地域にひろがり、多くの人々の理解と支援を戴きながら12年間歩んで来ることができました。

本稿では、この「鳥海山にブナを植える会」の取り組みを紹介するとともに、「なぜ今、ブナなのか」をあらためて考えてみたいと思います。

私たちは「出羽の富士」と呼ばれる美しい山、鳥海山の麓に住んでいます。この山の周りに住む人々は、はるか縄文の昔から鳥海山の恵みを受けて暮らしてきました。この山がもたらしてくれた自然の恵みというのは、山を埋めつくしていたブナの原生林と、山に積もった白い雪とによってつくられたものでした。

「里山」という言葉の提唱者である森林生態学者の四手井綱英氏は『ブナ帯文化』という本の中で、次のように書いています。



■図1—ロゴマーク

『私が1937年(昭和12年)の春、最初に就職したのは、山林局の秋田営林局であった。秋田に着いて辞令を貰って早々、下宿も何も準備していないのに、その日のうちに本荘営林署にやられた。今でこそ2営林署(本荘、矢島)に分かれているが、当時の本荘署は鳥海山から海岸の黒松砂防林を含む広大な面積を担当する署であった。(中略)

平野部や山裾には暖温帯性の落葉広葉樹林といわれるクヌギ、アベマキの林やケヤキの大木も残っているが、ほんの少し山地に入ればそこは世界の北半球冷温帯特有のブナを主として、ミズナラの混じった森林が広く分布しているのである。このブナ林は鳥海山腹をくまなく覆っていたといつてよい。

山裾はいわゆる里山で、薪炭の生産のため二次林化したり採草地化した所も多かったが、少し奥地へ入るとヘクタール当たり数百立方メートルにもなるブナの原生密林もあり、疎立した大木林もあった。(中略)

出羽山地に属する、鳥海、月山、飯富の諸山には亜高山帯の針葉樹林を欠き、ブナ森林限界を形作り、いわゆる偽高山帯には素晴らしいブナの美林が当時は存在していたのである。』

2—鳥海山のブナの森

鳥海山の広大なブナの原生林は、遙か昔から幾世代にも渡って天然更新を続け、その姿を保ってきたのです。それは、日本海側のブナは活力が高く、豪雪にも強いので、鳥海山の風土によくマッチした樹林だったからなのです。

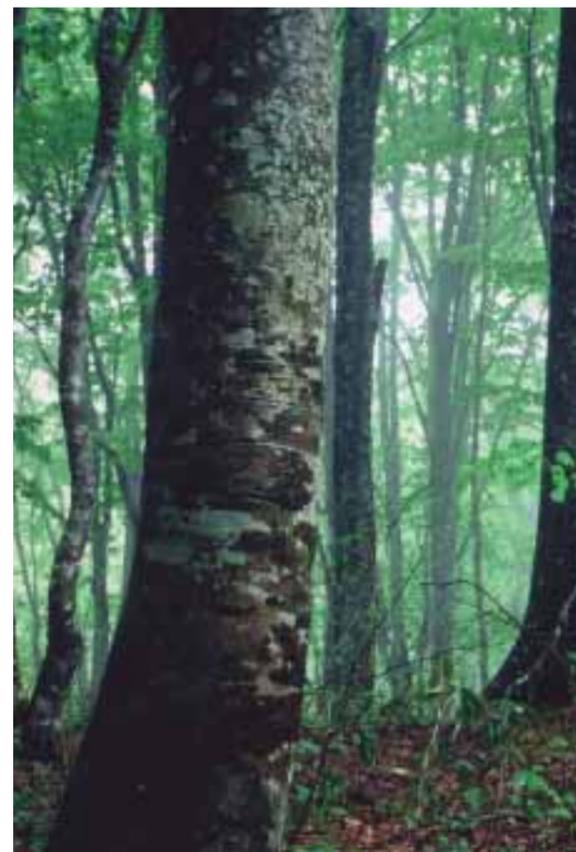
しかし、明治以降の産業の近代化、特に第二次世界大戦後の復興のために、木材やパルプの需要が高くなり、ブナ林の伐採が広範囲に渡って行われました。そし



■写真1—鳥海山と象潟の海

て多くのブナ林がその姿を消してしまいました。鳥海山のブナも例外ではありません。

象潟の霊峰あたりから銚立までのブナ林は、かつて東は奈曾溪谷の崖っぷちから、はるか西南の筥ヶ岳下までの広い範囲をうめつくしていたのですが、今はほとんど姿を消してしまいました。中島台の原生林は秘境といってもいいほどの素晴らしいものでしたが、今では見る影も無くなってしまいました。矢島登山道の二合目の木境から五合目の祓川下までが、広い鬱蒼としたブナの原生林で、ブナの大樹が見渡す限りあったのですが、今



■写真2—鳥海山のブナ林

は登山道の傍らに観察保存林として申し訳程度に残されているに過ぎません。百宅の奥にある上玉田川、赤沢川、朱ノ又川の流域もほぼ皆伐されてしまいました。

山形県側の鳥海山南山麓でも同じことが行われました。伐採された広大な跡地はブナ林として再生されずに、スギやカラマツなどの人工林に変えられましたが、多くはチシマザサに埋まってしまい、このため、自然にはブナの再生が不可能になってしまいました。

私たちは、ブナの森の再生を願っています。それはなぜかという、縄文時代以前の遙か昔から形作られてきたブナの原生林には、それなりの自然の摂理があって成立していたものだと思うからです。そして、ブナの原生林の恩恵を受けながら、何千年もの間、人々は鳥海山の周りで生活を成り立たせてきました。また人間だけではありません。鳥海山のブナを頼りに生きてきた動植物にとっても、ブナの森はどうしても必要なものなのです。

3—ブナの森は豪雪に強く、鳥海山によく似合う

鳥海山は東北地方にあっては、日本海に一番近く、2,236mの独立峰です。したがって、冬になると日本海から吹いてくる強い季節風とそれによってもたらされる豪雪とがつきまといます。こうした厳しい環境だからこそ鳥海山のブナは、地中にしっかりと深く根を張って、200年も300年も生き続け、大樹に成長します。

冬になり、葉を落として身軽になったブナは、豪雪や強い季節風に難なく耐えることができます。ですからブナの林は、鳥海山に似合っているのです。そればかりではありません。ブナの木の下には多くの積雪がありますが、この雪をしっかりと支えて、雪崩を防いだり、雪解けを徐々に進めて洪水を防いだりする役目もしています。さらに樹間に積もった雪は、その下に生きる低い木や草



■写真3—鳥海山の伏流水・元滝

などの植物や虫などの生き物たちを、冬の厳しい寒さから守ってくれます。

4—ブナの林は巨大な自然のダム

ブナは直径40cmの木で約10万枚、60cmの木で約36万枚の葉を付けます。この一枚一枚が自分に必要な栄養と動物たちに与える栄養をつくり、さらに大気中の二酸化炭素を吸収し、新鮮な酸素をも作り出しています。けれども、もっとも重要な役割は多量の落ち葉にあるのです。

ブナの林では、1ha(約1町歩)当たり、年1.3～9.0t位の葉を落とします。これが地表にたまり、厚いスポンジ状の腐葉土層を作ります。このスポンジ状の層が保水能力を高め、雨水を溜め込みます。そしてこの水が徐々に地中にしみ込んで、何年間も地下水として貯められています。ブナの林は人工のダムよりも何倍もの水を貯め込む、自然のダムなのです。

この自然のダムは、川の安定した流れを保障しているのです。もし、この腐葉土の層が無くなったら、雨水は地表を走るように流れ、洪水を引き起こしてしまうでしょう。

5—ブナの森からの自然の恵み ～山菜から漁場まで～

ブナの森の多量の落ち葉は長い年月をかけて腐葉土となりますが、この豊かな土壌が様々な植物を育み、その植物が虫や鳥、獣たちを養います。またブナの実も動物たちの大切な餌です。ブナの森は、多様な生命を育む命の森です。人々もブナの森から生活に必要な薪や炭、山菜、そして熊やウサギなどの獲物をもらい受けてきました。

それだけではありません。ブナの腐葉土層に溜め込まれた水は、腐葉土から栄養分を沢山もらい受けるのです。これが鳥海山一帯に湧き出る湧水なのです。湧水

は雄物川や子吉川、白雪川や奈曾川、月光川や鮭川となって海に注ぎます。この豊かで安定した川の流れは、広い水田を潤し農業を発展させてきました。

また海から川に遡上するアユ・マス・サケに餌や産卵場を与え、稚魚を育ててきました。縄文時代に作られた矢島の「サケ石」や月光川などに伝わる「サケの大助、小助」の行事は、このことを物語ると考えられます。

さらにこの川の水は、海に流れ込んで海中のプランクトンや海藻を育てています。川から流れ込む水に、腐葉土から溶け出した腐植物質が、たっぷり含まれていないと、貝や魚に必要な餌となるプランクトンや海藻がうまく育たないといわれています。そうになると貝や魚の数も減り漁場も貧しくなってしまいます。ブナの森が貧しくなれば、海も貧しくなって、漁場も貧しくなってしまうのです。沿岸漁業を豊かにするにも、ブナの森が必要なのです。今なら間に合います。ブナを植えて育てましょう。

鳥海山麓一帯にブナの森を再生・復活させるために秋田県、山形県、国有地、民有地を問わず植え続けましょう。こつこつと、大人も子どもも、男も女もみんなで植えましょう。植えるブナの苗も育てましょう。親から子へと受け継ぎ100年かけて育てましょう。そのとききっと、夢がかなうブナの森が鳥海山に甦ることでしょう。これは、人と自然との共生を保ち、次世代への良い地球環境を残す偉大な仕事になるでしょう。

6—将来に向けて

鳥海山から滋味豊かな水を始め、たくさんの恵みを頂いています。米づくりの場でも、この水を汚す事なく、海に帰したい。そして、空も土も損なう事なく、生き物たちと共存できる自然を残すため、無農薬無化学肥料米の生産拡大に努力しております。

大漁旗のもと、漁業者、農業者、ボランティアによる森



■写真6—大漁旗とブナの植樹

と川と田んぼと海をつなぐ森づくりは、営々とくり返されてきた自然の循環に対する恩返しです。ふるさとの山をこのままにしていれば、いずれはしっぺ返しを受けます。地域に暮らす人々の生活を豊かなものにするため、そして後世に受け継ぐためにも、ブナの森、ふるさとの森を守り育てる事が私たちの使命であると思っています。

「鳥海山にブナを植える会」の会員数は平成18年7月現在、617人です。高齢による退会もありますが、新規に入会する方も居り、将来的に会員減少について心配はしていません。ボランティア活動の持続性を図るために組織運営のスリム化を進め、学校、地元企業などの団

体の参加に際しては、各団体で独自のプログラムを立ててもらって本会が支援する仕組みをとっています。「継続こそ力である」をモットーに今後とも永く植樹をしていくつもりです。

今後の大きな課題のひとつに、地元農業者・漁業者への植樹活動のより一層の浸透があります。循環型社会構築の一環としても植樹活動が地域社会にもっと深く、広く理解されようとする必要があると思います。

<参考文献>
冊子「ブナの森の甦りをめざして」鳥海山にブナを植える会編集



■写真4—晩秋のブナ林



■写真5—アイガモ農法による米作り



■写真7、8—植樹する親子

